

中華民国期における蒙旗教育に関する一考察

— 奉天東北蒙旗師範学校を中心に —

于 逢 春

(2002年9月30日受理)

A Study on Education of Mengqi in the Republic of China
— Focus on the Northeast Mengqi Normal School in Fengtian —

Yu Feng chun

This paper, centered on the change of political idea of Merse, a Mongolian politician and national educator, examines the process and the purpose of his establishing of Northeast Mengqi Normal School. Also, it illustrates the conditions of education in the school, and clarifies the relationship between the change of political idea of Merse and the establishment of the normal school.

Key words: Merse, Hulanbeier Rebellion, Public Hulanbeier School, Society for Promotion of Mongolian Culture

キーワード：メルセ、呼倫貝爾暴動、公立呼倫貝爾蒙旗学校、蒙古文化促進会

はじめに

1928年6月、東北地方の行政・軍事長官である張作霖、黒龍江省長である呉俊昇は、関東軍に爆殺された。内蒙古人民革命党の元秘書長であるメルセ（漢語名、郭道甫）などは、中国東北が動揺した際、コミンテルンの指令により、ソ連及び外蒙古（現在の蒙古国）地方に留学した蒙旗¹⁾青年40人余りを連れて、ソ連、外蒙古の境に近い呼倫貝爾地方のハリンアル山を根拠地に、武装暴動を行い、呼倫貝爾（フルン・パイル）地方の「独立」を取得することを決議した²⁾。また、ハリンアル山に駐屯する呼倫貝爾保安隊下の小隊を策動し、暴動隊列に参加することに成功した。続いて、新巴爾虎左翼旗と新巴爾虎右翼旗に進駐し、かつ新巴爾虎左・右翼旗、及びその旗下の佐（内地の郷に相当）の青年官員を策動し、一部牧民を鼓動し、暴動に参加した。同年7月初め、暴動隊列は、シベリア鉄道の一部である中東鉄道を襲撃し、中東鉄道の嵯崗駅を攻撃した。

呼倫貝爾暴動事件が起こった後、黒龍江省当局は、黒龍江省駐屯軍である劉鈞衡などの三つの連隊を海拉

爾、満洲里などの地方に派遣した。劉らは、暴動隊列を壊走させた。一方、暴動隊列の根拠地が辺境にあり、また、暴動隊列がソ連の支持を得たという事実を鑑み、東北政務委員会³⁾長官である張学良は、進攻停止命令を下した。談判を通して暴動者の一部要求を満足させる上で、かれらを落着かせようとした。1928年9月、遼寧省長であり、郭道甫の恩師でもある翟文選の斡旋により、メルセは単身、張学良と会見し、いわば投降することとなった。メルセは張学良と直接に協商したことを通じて、蒙旗改革、とりわけ呼倫貝爾副都統公署に関する協議が達成された。その内容は、次の通りである⁴⁾。

- (1) 現行の呼倫貝爾副都統公署体制を改革し、参議会を増設し、青年を参議会に引き入れること。
- (2) 近代的学校を大いに増設し、人材を養成すること。
- (3) 実業を振興し、人民生活を改善すること。
- (4) 教育、行政経費を増加し、地方自衛隊を拡充すること。
- (5) すべての暴動参加者を責任に追究しないこと。

同時に、張学良はメルセを招聘し東北政務委員長官公署諮議に任命した。張学良がメルセを救済した理由は、はっきりしていない。おそらくメルセが有力者の家系につらなり、その時点ですでにながりの影響力を蒙古族のあいだでもっていたことと無縁ではなからう。

1928年10月、メルセは、瀋陽に「蒙古文化促進会」を創立した。翌1929年7月、瀋陽に東北蒙旗師範学校を創設した。メルセは、1910年代末期を通して東北地方西部と内蒙古における政治運動の指導者、また教育者として活躍し、1931年の「満洲事变」勃発直後に消息を絶った人物である。その40年にみえない短い生涯のなかで、かれは4冊の著作を漢語で出版しており、外蒙古問題、中国と内蒙古との関係、さらにかれの郷里である呼倫貝爾について論じ、民族、国家、地域に言及している⁵⁾。しかもかれの置かれた政治的状況とともに、その主張は変化しており、1920年代における内蒙古の政治的錯綜が投影されていた。また、メルセは米国の蒙古問題研究者、O. ラティモアとの交流を介して、その主張の一端は当時の国外にも知られた⁶⁾。同時に教育者としての活動、とりわけ東北蒙旗師範学校を創ったことから、多くの蒙旗青年のこころをとらえ、失踪後も内蒙古での政治運動に与えた影響は大きい。

ところで、民国期の東北地方西部と内蒙古の蒙旗教育、とくに同地方の蒙旗教師養成事業と蒙旗少数民族人材養成事業を推進したメルセに関わる東北蒙旗師範学校を取り上げ、その実態の解明に迫ろうとした本格的な研究は極めて少ない。先行研究のうち、中国側では、内蒙古ダオール学会の関連研究者がメルセの生涯の事跡及び政治活動を明らかにしようとしている⁷⁾。また、孟志東、申建中などは、教育史の視点から東北蒙旗師範学校の諸状況を述べているが、僅かに触れている程度である⁸⁾。日本側では、中見が政治学の角度からメルセの著述を読み解き、かれの政治意識と行動の意図を解明しようとしている⁹⁾。しかし、メルセの初期蒙旗教育実践、東北蒙旗師範学校の設立経緯、学習状況がどのように存在したのか、また初期に民族独立、後期に民族自治を目指す社会・政治活動を行ったメルセがなぜ東北蒙旗師範学校をつくり、民族教育を最重要視したのか、とくに同師範学校の成立がメルセの思想転換との間で、どのように関係していたのかが、解明されていない。

本稿は、こうした研究状況を踏まえつつ、前述した課題を出来る限り明らかにしようとするものである。

一. メルセの蒙旗教育に対する初期の実践

1. 1910～20年代初頭の呼倫貝爾情勢及びメルセの家系

メルセ (Merse) は、1894年、呼倫貝爾の札拉木台で生まれた。メルセの政治・民族教育活動を理解するためには、その出生の地である呼倫貝爾の蒙古系ダオール部族の状況と、清朝末期・民国初期における内・外蒙古の政治情勢に触れることが必要となろう¹⁰⁾。

19世紀末～20世紀初頭、清王朝の国民統合政策、即ち藩部と内地一体化政策、とくに急速な「漢化」政策の実施に伴い、とくにロシアの策動及び援助の下で、外蒙古地方のラマ教の最高指導者であるジェブツングムバ・ホトクト (活仏) を始めとして王公層、大ラマ階級は、清政府に対する不満が高まっていた。1911年、ジェブツングムバ・ホトクトは、辛亥革命が起こり、内地が混乱状態にあった機会に乗じて、ロシアをうしろ盾として、外蒙古独立を宣言した。ポグド・ハーン政権が樹立された。初期のポグド・ハーン政権中枢には、内蒙古出身者も参画しており、外蒙古以外の蒙古族地域へも独立政権参加への働きかけがなされたが、まず第一に呼応したのが、呼倫貝爾地方である。呼倫貝爾地方の諸蒙古系民族 (部族) は清朝時代、5翼17旗に分かれ、各翼に総管1名が置かれていたが、そのひとりでダオール部族の有力者、勝福を中心に1912年1月、旧清朝勢力を排除し地域権力の掌握と、ポグド・ハーン政権への合流がおこなわれた。

1915年の中・露キャプタ協定により、外蒙古は、中国宗主権の下で「自治」を行う権限を獲得した。呼倫貝爾は、この自治外蒙古の範囲から除外された。呼倫貝爾の区域自治、具体的には、勝福を指導者とする政権による自治を確認する協定が、中露両政府間でおなじ1915年に締結され、勝福が中華民国大總統によって呼倫貝爾副都統に任命された。

1916年、中華民国の大總統であった袁世凱は帝政復活をめざしていたが、中国国内では反対運動がおこっていた。このような混乱をみて、日本側は参謀本部を中心に、袁の追落を計画し、反袁謀略の一部に、呼倫貝爾に本拠地を設営した元の東北蒙古族反清一揆のリーダーであるバボージャブを利用しようと企てた。だが袁の急死により、すべての工作は日本政府により禁止された。1917年初め、このバボージャブ敗残部隊は、呼倫貝爾に戻り再び勢力を糾合し、次第に勝福と対立した。勝福は旧バボージャブ部隊により、一旦は追い落とされたが、ロシア軍の援助をえて権力奪回に成功した。

1917年末、ロシア社会主義革命後、外バイカル地方ではモンゴル系ブリヤート部族人による政治運動が活発

化し、これを利用しようとしたのが、モンゴル系ブリヤート人の血をひくG・M・セミョーノフであった。1918年、セミョーノフは敗退した部分のロシア軍隊、及び武装匪賊を率いて、呼倫貝爾の中核地域である海拉爾に忽然と登場した¹¹⁾。

これと同時に、1920年1月、呼倫貝爾の区域自治を保障していたロシア帝国の崩壊に伴って、呼倫貝爾副都統公署は自発的にその区域自治を廃止せざるをえなかった。

メルセは、このような情勢にあつて、複雑な呼倫貝爾地方に成長していた。かれに関して注目すべきは、その家庭環境とかれをとりまく社会関係である。メルセの旗籍は呼倫貝爾索倫左翼鑲黃旗に属し、祖父の成善は呼倫貝爾副都統公署左庁正堂として勝福を補佐し、父の榮禄も左翼鑲黃旗の副総管をつとめる、地元有力者の家系に生まれている。約10歳時には、海拉爾城八旗滿蒙学堂に滿洲語と蒙古語を勉強した。同時に呼倫貝爾道尹（尹，知事）である翟文選を師とする漢語を学んだ。1910年には、齊々哈爾の黒龍江省第一中学に入学、14年に卒業し、ついで15年、つまり呼倫貝爾の区域自治が承認された年には北京にでて、外務省俄文専修館に入学した。さらに、この遊学前後にメルセは結婚をしているが、妻の姉は、勝福の甥で、勝福の死後、16年に呼倫貝爾副都統職を継いだ貴福の子、凌陞に嫁いでいた。したがってメルセと凌陞は夫人を介して義兄弟の関係となる。

2. メルセの蒙旗教育改革実践

(1) 呼倫貝爾青年会の誕生

前述したバボージャブの残党が呼倫貝爾に混乱をまきおこした際、メルセの長男は死亡した。同時にメルセも北京より帰郷した。後年、メルセがこの時代を回顧した時、呼倫貝爾をはじめ「独立」ついで「自治」の旗を押し立てたものの、日々「自然淘汰」の波に洗われ、自滅の「地獄」へとひた走っていたと感嘆した。そしてロシアと日本の進出も警戒しなければならない。このような危機感から、黒龍江省内の学校、北京の専門学校に学んでいた青年たちを中心に、メルセが指導者となって、「地方政治改良」を目的とした「呼倫貝爾青年会」が1917年に結成された¹²⁾。

(2) メルセの外蒙古独立問題認識及び政治活動

呼倫貝爾地方の独立運動終焉の翌1921年、外蒙古は、もう一回独立を宣言した。1922年、23年、メルセは、二度に外蒙古を訪問した。それぞれ『蒙古問題』（23年2月出版）、『新蒙古』（23年11月）を出版した。これらの本でメルセは、独立を宣言した外蒙古新政府を

総じてきわめて高く評価している。また、第二回の訪問により、メルセは外蒙古の党と政府とくに人民党の指導者であったダムバドルジと連絡をもつにいたった。同年冬、メルセはモスクワを訪問し、ソヴィエト・コミンテルンとも連絡を取った。さらに、蒙古人民党入党と言われる¹³⁾。

モスクワから戻ってからメルセは、コミンテルンの意図に基づき、白雲梯（蒙古語名はセリンドンロブ、中国国民党候補中央執行委員）、アルタン・オチル（当時は国民政府国会議員）、エンケ・パト（国民政府国会議員、国民党中央執行委員）らと協議し、政治組織をおこすことをめざした。1924年の冬、北京で準備会議がおこなわれ、外蒙古の人民革命党との連絡もとられたうえで、翌25年10月に至り、白雲梯を委員長、メルセを秘書長として、外蒙古、コミンテルンの代表も参加し、内蒙古人民革命党第一回大会が張家口で開催された。

(3) メルセの初期教育活動

呼倫貝爾地方では、1908年、最初の近代的初等教育機関の創立から1911年の時点まで、呼倫貝爾、齊々哈爾地方の蒙旗小学校は18ヶ所に達した¹⁴⁾。1911年の辛亥革命の混乱の中で、多くの学校が閉校した。1914年に至って、呼倫貝爾、齊々哈爾地方の蒙旗小学校数と生徒数は清末のレベルに回復したが、学校の規模が小さく、数量も足りなかった。とくに1917年、海拉爾はセミョーノフに占領された後、海拉爾市街内の唯一の官立呼倫貝爾蒙旗高等小学校、及び幾つかの私塾も閉校された。このような状況下、メルセは1918年初めに、海拉爾市街内の自家不動産を校舎として、呼倫貝爾蒙旗小学校を創立した。これから、メルセの社会活動は、政治活動と並んで、教育・啓蒙活動を重視していることがわかる。つまり学校教育を通じて蒙古族、とくに蒙古族青少年層の意識改革を行い、さらに民族自治、ないし民族独立の人材を養成しようとした。

しかし、この私立学校の経営はかならずしも順調に進まず停止した。1920年春、メルセは北京、天津をまわり、みずからはクリスチャンであると称して、教育事業への募金も行っていった。1920年秋、メルセの建議によって、呼倫貝爾副都統公署は、呼倫貝爾蒙旗小学校を公立呼倫貝爾蒙旗学校に変えた。同学校は、小学校部と中学校部に分けられた。また、メルセは校長に任命され、メルセの政治活動の同志ともなるボヤンゲレル（福明泰）を副校長にすえた。1921年の時点で、この学校は200名の生徒があった。メルセは、中学校部の修身科の担任教員を兼任した。主な民族自決、民族自治、ないし民族独立及び国内・外の形勢を教授し

た¹⁵⁾。因みに、この学校の中学校部の生徒の多くは、1928年の呼倫貝爾暴動の主な構成員になった。

学校を経営すると同時に、メルセは、内蒙古人民革命党の活動に参加した。また、呼倫貝爾青年会の活動を引き続き行っていた。そして、同青年会々員である華林太、郭文向、フルラトなどを日本、ワフをアメリカに派遣し、留学させた。

二. メルセ思想の転換及び東北蒙旗師範学校の設立

1. 東北蒙旗師範学校の設立

1928年9月、メルセが瀋陽に来たばかりにころ、太平洋問題調査会（IPR）の第3回会議が京都で翌1929年に開催される予定で、いわゆる「満蒙問題」が討議されることになっていた。中国側は、日本側との論戦に望むため、遼陽で準備会議を開催した。この準備会議において、メルセは「蒙古問題」について講演を行った。この講演は、1929年末に『蒙古問題講演録』という書名をかぶせて、出版された。

その講演の冒頭で、「外蒙古の革命運動」についての評価は、これ以前の肯定から現在の否定へと大いに变化していた。その講演の最後に、ソ連の指導下で、「自称独立平民共和国の外蒙古」、真の意味での「独立国家」を建設することができない。現時点で独立国家が建設できないならば、ほかの民族との「連合」を模索しなければならない。もし経済・文化が進んでいたロシアや日本民族と連合すれば、「同化」、「滅亡」しかない。その意味では、おなじ弱小民族で、関係の密接な漢族との連合が、ロシアや日本よりも適切であると結論づけている¹⁶⁾。即ち、蒙古族は、中国主権の下で、自治権を獲得すべきであり、独立するのではない。しかし、「現在の内蒙古の現状は、貧・病・愚の三者が互いに交錯していたと言える。貧、病の根源は愚昧にある。愚昧無智は、貧窮、多病にもたらしたことが免れない「文化知識があれば、生産に励み富を作られる。同時に、衛生を重んじ、病気を予防できる。だからこそ、蒙古族の唯一の活路は、文化を促進し、教育を興すことにある」¹⁷⁾。「現在、蒙古族に直面する現実、文化を進歩、教育を発達させようとするれば、蒙古族自身の努力と漢族の援助とも欠かすことができない」¹⁸⁾。

このような意識に基づき、メルセは、挫折により政治舞台からは一旦は遠ざかったようになり、全力を蒙旗文化・教育の振興という事業に尽そうとした。1928年10月、瀋陽青年会館で「蒙古文化促進会」成立会議が開催された。科爾沁左翼旗々長である親王イェシカイ

ジュン（業喜海順）は推選されて会長になり、メルセは推選されて秘書長になった。蒙古文化促進会の宗旨は、「蒙旗文化を促進し、教育を興し、愚昧状態から抜け出す」ということである。

1928年末、メルセは蒙古文化促進会の名義をもって東北蒙旗師範学校の設立提案を東北政務委員会に提出した。翌29年1月、この提案は批准された。同年2～6月末、蒙古文化促進会の提案と東北政務委員会の修正案に基づき、東北蒙旗師範学校は、奉天省都である瀋陽市街で準備開設されていた。同学校の所在は、大きな四合院建物であり、運動場が付設された。

東北蒙旗師範学校は、理事会を設立した。東北軍政長官である張学良が同校の理事長、東北地方政界長老である袁金鎧が副理事長、哲里木盟達爾罕旗々旗長である達爾罕親王ナムジロシロン（那木吉勒斯楞）などが理事を担任し、メルセは校長に任命された。

同年7月1日、瀋陽市で開校式典が挙行された。当該校の張学良理事長、袁金鎧副理事長、達爾罕親王理事など、及び劉尚清遼寧省長、莫家象遼寧省教育庁長、袁慶恩東北蒙旗処処長、王以哲東北軍模範旅団長、在瀋陽各蒙旗王公、蒙旗諸名流、各蒙旗代表らが、参加した。

2. 東北蒙旗師範学校章程

メルセらは、東北蒙旗師範学校を準備開設すると共に、「東北蒙旗師範学校章程」も制定した。同「章程」は、全部で16条であり、校名、創立宗旨、教員・生徒資格、教科などを規定した。その具体的な内容は、次の通りである¹⁹⁾。

東北蒙旗師範学校章程

- 一. 本校は東北蒙旗師範学校と命名する。
- 二. 本校は蒙旗の教育人材を育成する上で、蒙旗文化を促進し、蒙旗を振興する人材を養成することを宗旨とする。
- 三. 本校の経費は遼寧省によって支給される。
- 四. 本校は遼寧省都に設置する。本校は、本部の外、付設小学校を設置する。
- 五. 本校は若干名の理事を設置し、それは東北政務委員会によって招聘された各蒙旗の王公及び遼寧省教育庁長が担当する。
- 六. 本校は校長1名、教務主任1名、訓育主任1名、文書起草係1名、庶務兼任会計係1名、専任教員5名、その他の教員は本校内外の人員を招聘し兼任させること。その他、付設小学校主任1名、付設小学校の高級クラス主任

2名、付設小学校の初級クラス主任2名、また、専門の教科目教員2名、師範科雇員3名、小学校雇員1名である。

七. 本校は蒙古族と漢族学生を半分ずつ募集する。講習科を暫定2段階とし、師範科を暫定2段階とする。付設小学校では、高級クラスを暫定2段階とし、初級クラスを暫定2段階とする、50名毎に2学級とする。

八. 講習科は2年、師範科は3年、付設小学校の高級クラスは2年、付設小学校の初級クラスは4年で卒業する。

九. 講習科の蒙古族生徒は蒙古語が流暢しなければならず、漢語が少しばかりできる。年齢は17才から30才までで、該当の所属する旗公署によって選抜して推薦され、或いは自ら志願する。漢族生徒は初級中学で3年以上の課程を修了し、本校の試験に合格しなければならない。

師範科の蒙古族生徒は漢文が少しできる、そして一定の学歴を持つ。年齢は17才から30才までで、該当の所属する旗公署によって選抜して推薦され、或いは自ら志願する。漢族生徒は初級中学で2年以上の課程を修了し、同じ学歴を持ち、年齢は17才から25才までで、本校の試験に合格した者でなければならない。

一〇. 師範学生は制服の費用を納める以外、食事、宿泊と書籍の費用は本校が提供する。付設小学校は学費以外、全て自分で用意する。蒙古族生徒を励むために、官費生を10名設置する。

十一. 卒業成績が優秀な師範生は、本校によって東北政務委員会に申請し、蒙旗教育行政機関職員として任用する。その他は蒙旗の小学教員に任命するように申請する。

十二. 教科 (略)。

十三. 教科書の蒙古文翻訳、(略)、(本稿の第三章を参照)。

十四. 本校の校長は東北政務委員会によって委任する。教務主任、訓育主任、教員、事務員及び付設小学校主任、付設小学校教員は校長によって招聘し、記録に載せてもらうよう東北行政委員会に報告する。

十五. 師範生中退する場合、在校費用を納めるよう追及する。

十六. 本校の各細則は当面の形勢に順応し、教育法令を参酌し、別に規定すること。

上記の「章程」「二」の内容は、メルセの要求を受けて、決定されたものである。ある蒙古族青年は、学

力が足りないが、入学の願望が強かった。かれは、入学願書の中で「入学の目的は、蒙古族同窓と一堂に会し、思想を交流すると共に、渡りをつけて親しくすることにある。従って、民族の振興のため、奮闘する人になりたい」と書いた。メルセは、この入学願書を読んだ後、その入学申請に快諾的に許可した。そして、その後、講演した際、「我が学校は、このような思想を持っている学生を養成したい」と強調した²⁰⁾。

また、同「章程」「七. 本校は蒙古族と漢族学生を半分ずつ募集」ということについて、1930年の時点に至って、蒙古族系生徒は400人、漢(満洲族を含む)・朝鮮族生徒は100人であった²¹⁾。同「章程」「一〇. 蒙古族生徒を励むために、官費生を10名設置」に関して、実際は、官費生10名の外、全ての蒙古族学生の学費・雑費は、所属する旗公署によって奨励金を支払い、宿舍が無料のみならず、食費も旗公署によって支払い、全部で月給15圓(普通職員の半月給与に相当)であった²²⁾。同「章程」「三. 本校の経費」について、当該経費の主な部分は、奉天省が年毎に27,000圓を支出し、不足の部分は内蒙古地方の各旗が補足したのである。当時の奉天省の27ヶ所中等学校において、東北蒙旗師範学校の経費は、最も充足したのである。相当な部分の生徒が春、夏休みに帰る時、交通代も学校によって酌量してに支払われた²³⁾。

なお、東北蒙旗師範学校付設小学校は、東北蒙旗師範学校(本部)設立後の翌1930年初めに設立された。同年3月、蒙旗の子供200名を募集した²⁴⁾。

3. 東北蒙旗師範学校生徒の募集

1929年3月、東北蒙旗処は、その機関紙『蒙旗旬刊』に蒙古文・漢文で東北蒙旗師範学校の設立宗旨、学校状況、入学資格、生徒待遇、進路などを詳しく紹介した。同時に第2回「東北蒙旗師範学校募集要項」をも掲載した。同「要項」の内容は、次の通りである²⁵⁾。

一. 宗旨 (略)

二. 所在地 (略)

三. 定額

後期師範生徒は1クラス50名(蒙古族も漢族も受け入れる)、師範講習生徒は1クラス50名(蒙古族も漢族も受け入れる)。

四. 資格

後期師範科に入学する者は初級中学校卒業、師範講習科に入学する者は高等小学校卒業すべき。

五. 年齢

後期師範生徒は15歳から25歳まで、師範講習科は15歳から25歳まで。

- 六. 出願期間
 民国19 (1930年) 年1月5日～2月25日。
- 七. 出願手続き
 身分証書と写真2枚 (縦4×横3 cm, 脱帽上半身正面, 最近撮影したもの), 試験費用は銀貨1圓を持参し, 本校の学生募集報名処に納めて領収書を取り, 自筆で出願書を書き, 試験を待命する。不合格者に対し, 試験費用以外, 身分証書と写真は一律返却する。
- 八. 試験期間。民国19 (1930年) 年2月26日～28日。
- 九. 試験項目
 甲. 健康診断
 乙. 科目試験
 A. 後期師範科
 国語, 数学 (算数, 代数, 平面幾何), 理化 (物理, 化学), 博物, 史地 (中国歴史, 外国歴史, 中国地理, 外国地理)
 B. 講習科
 国語, 数学 (算数), 理科 (常識), 本国歴史地理
 丙. 口語試験
- 一〇. 履修年限
 3年修了。
- 十一. 履修科目
 後期師範科, 師範講習科が履修する科目以外, 毎週蒙古語6時間を加える。
- 十二. 費用
 入学の時, 保証金は銀貨10圓 (卒業の時返却), 季節毎の制服費, 文具費は約55圓以外, 食事, 宿泊とテキスト代は学校側が提供する (保証金は中途退学者には返却しない)。
- 十三. 待遇
 卒業後, 成績が優秀な生徒は本校によって東北行政委員会に申請し, 蒙旗教育行政機関職員として任用する。その他は蒙旗の小学校教員に任命するように申請する。給料は優待する。
- 十四. 奉仕
 卒業生は所属する旗の各学校或いは教育機関で3年奉仕する。奉仕期間未満の時, 転職する者は, 在学時に享受した全部の公費を納めるように追及する。
- 十五. 募集要項 (略)。
- 十六. 附則, (略)。

新入生が入学手続きを済ませた後, 学校は, もう1回試験を行った。新入生らは, 蒙古文と漢文で試験問題を解した。学校は, その試験の成績によって新入生

を講習1クラス, 講習2クラス, 補習クラスの三つの学級に分けた。補習クラス, 講習2クラス, 講習1クラスの修業年限は, それぞれ1, 2, 3年である²⁶⁾。

三. 東北蒙旗師範学校の学習実態及び進路

1. 教師の資質

1929年7月, 東北蒙旗師範学校が開校した時, 同校は, 蒙・漢族教員20名があった。同学校の給与は, 同じレベルの学校よりはるかに多かったのみならず, 同校の理事長, 副理事長, 理事, 及び校長は, いずれも社会的著名人であるので, 同校は, 有名な研究者, 教育者及び名高い教員を招聘した。蒙古族教員のうち, 金鶴年は, 呼倫貝爾暴動の時, 東北政務委員会側の代表者として派遣され, メルセと交渉した, 訓育主任として任命された。著名な蒙古語研究者であり, 中華民国「初級国文教科書」(蒙古語訳)の審査者でもある克興額は, 蒙古語教員として招聘された。東北蒙旗処職員である汪宗洛は, 国語教育に担任した。漢族教員のうち, 名高い学者であり梁啓超の弟でもある梁啓雄は, 教養教員として招聘された。黄成光は, 1919年, 西北籌邊使である徐樹錚の幕僚として外蒙古を駐屯し, 蒙古語に精通した, 教務主任として任命された。王樹屏は, 東北大学の教師であり, 数学教員として招聘された。漢語専門家である李東白は, 国語教員として招聘された。その他の教員も日本留学或いは国内一流大学の出身者であった²⁷⁾。

2. カリキュラム

前記の「東北蒙旗師範学校章程」の「十二」条は, 該校の師範科と講習科の履修科目を分ける。前期師範科の教科は, 蒙古語, 国語, 教育学, 数学, 歴史, 地理, 理科, 公民, 細工, 図画, 音楽, 体育, 論理学, 心理学, 法制, 経済である。前期師範科の学年別と週の授業時数は, 表1の通りである。

表1の課程は, 当時の教育部が審査した中等師範学校カリキュラムに基づき, 設置された。当時の普通の中等師範学校は, 上述した課程の外, 外国語課程を設置した。東北蒙旗師範学校は, 蒙古語を設置して外国語課程に代えた。

東北蒙旗師範学校の講習科課程は, 当時の普通中学校の教科を参照した。違った点は, 当時の普通中学校は, 外国語を設置し, 講習科は蒙古語を設置して外国語課程に代えた。同校の講習科の課程及び週の授業時数は, 表2の通りである。

表 1. 東北蒙旗師範学校師範科課程

	第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年	
	前学期 週授業 時数	後学期 週授業 時数	前学期 週授業 時数	後学期 週授業 時数	前学期 週授業 時数	後学期 週授業 時数
蒙古語	7	6	5	5	5	3
国語	6	6	6	5	5	3
教育学	—	3	5	5	5	12
数学	4	4	4	4	4	4
歴史	2	2	2	2	2	2
地理	2	2	2	2	2	2
博物	2	2	2	2	2	—
公民	1	1	1	2	2	1
手工	1	1	1	1	1	1
図画	1	1	1	1	1	1
音楽	2	2	1	2	2	1
体育	2	2	3	3	3	3
倫理学	2	1	—	—	—	—
心理学	2	1	—	—	—	—
法制	—	—	—	—	1	1
経済	—	—	—	—	1	1
理化	2	2	2	2	—	—
合計	36	36	36	36	37	37

出典：「東北蒙旗師範学校章程」，遼寧省档案館蔵。

表 2. 東北蒙旗師範学校講習科課程

	第 1 学年		第 2 学年	
	前学期 週教授 時数	後学期 週教授 時数	前学期 週教授 時数	後学期 週教授 時数
蒙古語	7	6	5	3
国語	7	6	6	4
教育学	—	4	6	12 (実践)
算学	5	5	5	3
歴史	2	2	2	2
地理	2	2	2	2
理科	2	2	2	2
公民	2	2	2	2
手工	1	1	1	1
図画	1	1	1	1
音楽	1	1	1	1
体育	3	3	3	3
倫理学	2	1	2	1
心理学	2	1	2	1
法制	—	—	1	—
経済	—	—	—	1
合計	37	37	37	37

出典：「東北蒙旗師範学校章程」，遼寧省档案館蔵。

前期の講習科生徒は、講習科で 2 年を修了した後、もし続いて進学しようとするれば、同校の後期師範科に入学する。後期師範科カリキュラムは、普通高校と一致した。また普通高校教科書をそのまま使用した。

東北蒙旗師範学校の前期師範科、講習科では、蒙古語課程の外、該校の教授用語は、漢語であった。蒙古語教科書は、同校の教員である克興額が編纂する教材を使用した。また、同校は、蒙古地方が必要な蒙古語教科書及び蒙古語教育書類の編集・翻訳・印刷の責務

を担っていた。「東北蒙旗師範学校章程」の「十三」条によると、「本校は翻訳編集処を付設し、蒙古地方が必要な各種の教育書類を翻訳編集する。翻訳編集人員は本校の教職員が兼任するが、別に給料は支払わない。印刷費は本校によって臨時に政府に補助を申請する」²⁸⁾。

その他、東北蒙旗師範学校付設小学の高級クラスでは、そのカリキュラムは、普通の小学校と同じである。違った点は、付設小学の高級クラスは、正常な授業以外、毎週に蒙古語を 2 時間加えることである²⁹⁾。

3. 東北蒙旗師範学校卒業生の進路

1931 年秋、東北蒙旗師範学校は、第一期生徒が修了した。この第一期卒業生の進路について、全国の少数民族事務を主管する蒙藏委員会機関紙『蒙藏週報』は、次のように報道した³⁰⁾。

奉天東北蒙旗師範学校第 1 期卒業生が間もなく卒業し学校を去ることにかんがみ、進路問題は差し迫った。奉天東北蒙旗師範学校校長は、もっとも優秀な 4 名或いは 6 名を東北政務委員会によって各地に配属して採用し、次の優秀な 4 名或いは 6 名が本校付設小学校に採用し、その他が全部で各旗実地に配属し学校運営に奉仕する申請書を東北籌弁蒙旗事務委員会弁事処に提出した。当弁事処は簡単に改訂したあと、取り次いで東北政務委員会に提出した。東北政務委員会が常務会議の議決を経て、既に該校の要望に許可した。

上述した第一期卒業生は、全部で 33 名があった。そのうち、蒙古族は 28 名があり、漢族は 5 名があった。東北政務委員会と蒙旗師範学校附属小学校はそれぞれ 5 名を採用した外、その他の卒業生について、「達爾罕旗札薩克（札薩克、世襲爵位を持つ旗長）である達爾罕王などの決定により、卒業生の半分に各蒙旗教育行政機関の職員を担当させながら、半分に各旗の行政機関の職員に奉仕するよう命じた。今はもう既に各生徒の希望を求めて、配属した」³¹⁾。

因みに、1931 年 9 月 18 日「満洲事変」が勃発した後、東北蒙旗師範学校は一時閉校した。1932 年春、同校はもう一回開校していた。1936 年、同校は、齊々哈爾に遷移され、且つ現地の黒龍江蒙旗師範学校と合併され、興安師範学校に改称された。生徒数は、約 400 名に達した。1945 年 8 月、閉校した。東北蒙旗師範学校は、前後 17 年間存立し、数千人蒙旗青少年を養成していた。のちの 1940 年代の内蒙古自治運動に参加する多くの蒙旗青年が入学した。たとえば戦後の内蒙古における自

治運動の指導者で、内蒙古自治区副主席となったハーフンガなども、そのひとりである。

おわりに

かつて中見氏は、メルセの三部著作の図版を比べて研究した。即ち、メルセの第一作『蒙古問題』と第二作『新蒙古』の表紙のデザインは、同じである。つまり地球、またユーラシア大陸のうえを、蒙古の勇士 (bayatur) が旗をもって飛翔している姿を黒いシルエットで描いている。勇士の姿は今日の蒙古国首都オランバートルのスフバートル広場に立つスフバートル像とも同じである。そこにメルセの意図をみることができる。ところが政治的挫折を経たのちの第三作『蒙古問題講演録』では、地上を駆ける勇士のもつ旗は、あきらかに青天白日旗 (中華民国国旗) になっている。表紙にこめられた著者の隠喩を読み解くことができる³²⁾。確かに、メルセの軌跡をたどると、すくなくとも1928年6月の「呼倫貝爾暴動」まで、彼が行動の指針としていたのは、「ナショナリズム」であったと想定できる。ところが外蒙古 (モンゴル人民共和国) で進められていたのは、「蒙古国民」の形成ではなくて、実は「蒙古人民」をソヴィエト型に育成することにあつたのを、メルセはおもい知らされた。一時はコミンテルンの指令により、武装蜂起に参加するものの挫折した。これから、メルセの考えは、いやおうなく「中国」という「国家」を受入れ、そのなかでの内モン自治を促進する方向へ、つまり「エスノ・ナショナリズム」へとはっきりと転化した。

このような思想転換もメルセの1928年6月以前、以後の教育行動において現れていた。1918～28年、メルセは、蒙古族青少年層の意識改革を行おうとしたため、学校を創立した。この学校の狙いは、さらに民族自治、ないし民族独立の人材を養成しようとしたことにある。また、その時、メルセの教育活動は、政治活動と並行して行われていた。おおよそ、その教育活動は、その政治活動に従属するものであった。

1928年9月以降、当時の蒙古族社会の現状は、民衆が貧窮、伝染病が流行、また文化教育が極めて遅れていたという現実を鑑み、メルセは、挫折により政治舞台からは一旦は遠ざかったようになり、教育の発展によって蒙古社会を振興する突破口を企て、全力を尽そうとした。また、東北蒙旗師範学校は、「蒙旗の教育人材を育成する上で、蒙旗文化を促進し、蒙旗を振興する人材を養成することを宗旨とする」と規定した。興味深いのは、同師範学校のカリキュラムにおいて蒙古語と国語の教授時数は、その他の教科を遥かに超え

ていたことである。蒙古語と国語の教育を重んじたということは、実は「中国」という「国家」の枠組みにおいて、蒙古族自治を促進すると表明している現れと言えよう。

「満洲事変」の勃発、張学良の失脚は、メルセの教育を通して蒙古族を振興する前提条件の崩壊を意味した。しかし、日本の在東北・内モン支配崩壊以降、内モン自治運動がメルセの影響を残しつつ、さらにメルセの弟子らを中心メンバーとして展開されたことは興味深い。

【注】

- 1) 蒙旗は、東北地方の蒙古八旗と布特哈八旗を指す。蒙古八旗の地域は、内モン東部地方の卓索盟 (現在の遼寧省朝陽市、阜新市など地方)、昭烏達盟 (現在の内モン自治区赤峰市)、哲里木盟の蒙古族が居住する各旗 (旗、内地の県に相当) を含む。布特哈八旗の地域は、現在の内モン自治区の呼倫貝爾盟、黒龍江省の齊々哈爾地方を含む。上記の地域に居住している蒙古族と達斡爾族、鄂温克族、鄂倫春族はいずれも「蒙人」或いは「蒙古人」「蒙古族」と称された。
- 2) 郭道甫『呼倫貝爾問題』上海大東書局、1931年、27頁。
- 3) 東北政務委員会は、東北四省 (奉天、吉林、黒龍江、熱河)、東省特別区 (哈爾濱) を総理する政治、軍事、経済、外交などの機関である。
- 4) 前掲『呼倫貝爾問題』29頁。
- 5) 4冊の著作、『蒙古問題』出版地・出版社名不記載、1923年2月、『新蒙古』出版地・出版社名不記載、1923年11月、『蒙古問題講演録』瀋陽・東北蒙旗師範学校、1929年、『呼倫貝爾問題』上海・大東書局、1931年となる。
- 6) Kuo Tao-fu, "Modern Mongolia" pacific affdirs, Vol.3 No.8 (August 1930), pp.754-762.
- 7) 「郭道甫誕辰一百周年学術研究会專輯」『達斡爾族研究』第五輯、内モン自治区達斡爾学会、1996年。
- 8) 孟志東他『達斡爾族研究』第一輯、内モン達斡爾歴史語言文学学会、1987年。申建中他「達斡爾族教育史」『中国少数民族教育史』第一巻、広東教育出版社、1998年、1032頁。
- 9) 中見立夫「ナショナリズムからエスノ・ナショナリズムへ—モンゴル人メルセにとっての国家・地域・民族—」『現代中国の構造変動』7、東京大学出版会、2001年。なお、本文を書くにあたって、中見の先行研究を参照した。
- 10) メルセの生涯及び政治活動に関する記述で、とく

- に注記しない場合は、上記の中見の研究成果に基づく。
- 11) 生駒雅則「シベリア内戦とブリヤート・モンゴル問題」『スラブ研究』四一，1994年，192～193頁。
二木博史「大モンゴル国臨時政府の成立」『東京外国語大学論集』五四，1997年，39～41頁。
 - 12) 前掲『呼倫貝爾問題』，24～25頁。
 - 13) 二木博史「ダムバドルジ政権の内モンゴル革命援助」『一橋論叢』第九卷第三号，1984年，106頁。
 - 14) 徐世昌『東三省政略』「辺務・呼倫貝爾篇・紀学務」吉林文史出版社景印本，1989年。齊々哈爾政治協商會議文史資料委員会『齊々哈爾文史資料』第19輯，1986年，32頁。
 - 15) 前掲，『齊々哈爾文史資料』第19輯，32～44頁。
 - 16) 『蒙古問題講演録』瀋陽・東北蒙旗師範学校刊行，1929年。
 - 17) 内蒙古文史資料委員会『内蒙古文史史料』第31輯，内蒙古人民出版社，1979年，196～197頁。
 - 18) 同上。
 - 19) 「東北蒙旗師範学校之籌辦及其章程」東北蒙旗処機関誌『蒙旗旬刊』第1卷第8期，1929年。
 - 20) 前掲，『内蒙古文史史料』第31輯，196～197頁。
 - 21) 恩克巴図「我們所了解的郭道甫」孟志東他前掲書。
 - 22) 申建中他前掲書。
 - 23) 申建中他前掲書。
 - 24) 「東北蒙旗師範学校増設女子家事講習科」『盛京時報』1930年6月19日第2版
 - 25) 「東北蒙旗師範学校招生簡章」『蒙旗旬刊』第1卷5期，1929年。
 - 26) 同上。
 - 27) 孟志東他前掲書，173頁。
 - 28) 前掲，『蒙旗旬刊』第1卷第8期。
 - 29) 同上。
 - 30) 「奉天東北蒙旗師範学校首届卒業生分配」『蒙藏週報』第78期，1931年。
 - 31) 「蒙旗生分兩項服務」『盛京時報』1931年7月18日4面。
 - 32) 中見前掲書。

(主任指導教官 二宮 皓)